

番外編一 豊浦の校歌、その数奇な変遷とは!?

豊浦高等学校の校歌は、制定以来、幾度となくその歌詞を変えてきたことをご存知でしょうか？本編製作時では紹介しきれなかった校歌に秘められた驚きの歴史を番外編としてご紹介致します。

昭和3年に制定された豊浦中学校の校歌の歌詞は、以下の通りでした。

乃木將軍の生れにし処 狩野
芳崖生れし処 剣に筆に偉人
を出す 靈氣こもる地、これ
我が長府

此の櫛崎に、四王司山に 満
珠干珠の二つの島に 昔偲び
て望にもゆる 健児七百、こ
れわが学舎

大御光の宿れる旗を かざし
て高く正しく清く強き心と
体に生きて 止まず進むが我
等の理想

この歌詞を初めて読んだ時、驚きを隠せませんでした。特に、一番の歌詞にある「これ我が長府」という一文。校歌が制定された当時は「長府中学校」であつたため、これが本来の歌詞だったので。

大正12年4月から昭和6年6月まで長府中学校という校名だったものが、その後「豊浦中学校」に復された際に「これ我が豊浦」と改められました。

さらに二番の「健児七百」は、昭和9年に生徒定員が1000名に増加したことに伴い「健児集へり」と変更されています。これらの2箇所の変更は、作詞者である高野辰之氏の了承を得て行われたという記録が学校に残されています。

そして、三番の「大御光の宿れる旗」にも深い根拠がありました。これは明治36年に制定された校旗を指しています。明治35年11月、明治天皇が陸軍特別大演習統監のため西下された際、長府毛利邸を

宿泊所とされました。

この時、竣工したばかりの豊浦中学校講堂が予備の宿泊所となり、宮内庁から学校へ「御下賜金^{ごかしきん}」があつたと記録されています。この御下賜金で校旗が調製されたという由来から、「大御光の宿れる」という表現が使われたのです。

戦後の混乱と校歌の変容

歴史の中で校歌の歌詞はどのよう

に変わっていったのでしょうか。特集記事でも触れた通り、戦後早いうちから校歌の扱いは学校にとって大きな戸惑いだったようです。歌詞に問題のない二番だけが歌われていた時期もあつたようです。過去の同窓会誌においても旧歌詞は掲載されているものの、昭和3年当時のものは見つけることができませんでした。

その後、学校は下関東高等学校となり、新しい校歌ができたことでこの問題は解消されたかに見えました。しかし、再び長府高校と分離したことで、校歌の問題が再燃します。

ただし、下関東高校時代にも、

旧校歌は応援歌のような形で歌い継がれていました。豊浦OBでもある当時の諸井教諭の著書には、その歌詞がかなり「乱暴に処理されている」ことに驚いたと記されています。具体的には、一番が完全に抹殺され、二番末尾の「これわが学舎」が「これ我が豊浦」に、そして「大御光の宿れる旗」が「豊なる金字か、げる旗」と変わっていったのです。

当時、誰が手を加えたのかは不明だったようですが、運動会や野球の応援で生徒たちが独自に歌詞を改変したのではないかと推測されています。

昭和32、3年頃には、「豊なる金字かかげる旗」が文語詩の中で唯一の口語表現であると当時在籍の教諭からの指摘があり、「豊なる金字か、ぐる旗」と改められました。

新しい校歌を制定しなかった理由

長府高等学校と豊浦高等学校の分離が決まった後の合同職員会議では、下関東高等学校の校歌は両校とも使用せず、それぞれ新しい

校歌を作るという決議がなされた記録があります。

長府高等学校にはやがて新しい校歌が生まれましたが、豊浦では新しい校歌を作る動きは見られませんでした。必要に応じて、かつて「乱暴に処理された」とも思える旧校歌が歌われ、その実績が積み重なるうちに、いつの間にかそれが正式な校歌となっていたのです。伝統が引き継がれているのだから良いのではないか、という肯定的な空気が強かったと推測されています。

現在の校歌への定着と

残された課題

現在の校歌が完全に定着するきっかけとなったのは、昭和37年春の野球部甲子園出場でした。これを機に編成されたブラスバンドのために吹奏楽に編曲され、マーチ風の勇壮な前奏がついて一新されました。歌詞に不自然さが残されていたにもかかわらず、この時をもって生徒たちの間に完全に定着したのです。

これまでも校歌に関する問題は

幾度となく議論されてきましたが、結局、一番の歌詞を復活させるべきか否かの議論に終始し、明確な結論は得られていません。

前述の諸井教諭は、校歌がその学校の教育理念を表すものである以上、「現在の教育に乃木精神をどのように反映させるかの論議を重ねなければ解決しない」と、その著書を結んでいます。

諸井耕二氏（昭和2年下関市長府生まれ）は、昭和20年に山口県立豊浦中学校を卒業後、教職の道に進み、豊浦高等学校の教諭も務められました。校歌の変遷を間近で見てきた一人として、その記録は大変貴重なものです。

豊浦の長い歴史の中には校歌にも知られざる歴史があります。これは、まさに学校の歴史そのものと言えるのではないのでしょうか？

参考文献…秋月春風 諸井耕二著

番外編二 乃木将軍と豊浦中学校「無銘碑」に秘められた精神

日露戦争終結後、明治40年（1907年）1月1日、乃木希典将軍が郷里である長府を訪問し、10日間にわたって滞在しました。この時、豊浦中学校（現在の豊浦高校）との間に、将軍の手柄を示す逸話が残されています。

予期せぬ訓示

将軍滞在中の1月2日には、長府村を挙げての歓迎会が忌宮神社の境内で開かれました。この席上、当時の豊浦中学校校長であった河口隆太郎は、将軍に「私の学校を見て下さい」と案内を申し出ます。将軍はこれを快諾し、1月8日、3学期の始業式の日、豊浦中学校の講堂で生徒全員に対し、訓示を行うことになりました。



河口隆太郎校長銅像

当時の生徒の回想には、「カーキ色の軍服の胸間に燦と光る大勲章、力強く踏まる黒長靴の音、三軍を指揮せられたであろう腰間の剣は憂として鳴って声あり」と記されており、生徒たちは皆、旅順攻略の「壮烈たる武勲談」を期待して将軍の登壇を待ち望んでいました。

しかし、将軍は壇上で生徒たちを静かに見回し、意外な言葉を口に出しました。

「こうやって見ると、みんなよく静粛にしている。おとなしい。なかなか立派である。いつもその様にせねばならぬ」

将軍はそれだけを語り、静かに壇を下りたのです。校長がすぐさま感謝の意を述べると、将軍は謙虚な態度で「かねての御教訓と私の今言ったことが違っていたら訂正して下さい」と答え、校長の案内で退場しました。生徒たちは、この予期せぬ訓示に物足りなさを感じたと言います。

建立されなかった「祝勝記念碑」と「無銘碑」の誕生

講堂からそのまま帰ろうとする將軍を呼び止めた校長は、校長室に案内し、丁寧に旅順陥落祝勝記念のための碑を用意しているのので、一筆揮毫していただきたいと依頼しました。しかし、將軍は「私如きが書いては」と固辞し、どうしても筆を執ろうとはしませんでした。

このようにして、乃木將軍の揮毫を刻むに至らなかった記念碑は、後に「無銘碑」と呼ばれるようになります。

「無銘碑」に込められた想い

この「無銘碑」の経緯について、諸井氏が昭和44年（1969年）7月発行の「豊浦高新聞」に掲載されたコラム「伝」の中で詳しく触れています。

かつて旧正門の前の庭木の茂みの中に、乃木將軍の「無銘碑」（右側の高い方）と、その由来を刻んだ碑（左側）が立っていました。

日露戦争で乃木將軍が苦戦の末に旅順を陥落させたニュースは、

明治38年（1905年）1月9日、号外で將軍の郷里である長府にも伝えられ、町中が万歳の声で沸き上がりました。

この知らせに感激した豊浦中学の生徒たちは、校庭に旅順陥落の碑を建てることを決意。將軍の揮毫を願うべく、生徒全員で残雪を踏みしめながら安養寺へ赴き、大石を車に乗せて持ち帰りました。日章旗を交差させ、「萬人齊仰爾靈山」と大書した長旗を先頭になびかせ、校旗をひるがえし、爾靈山突撃の際に竹内連隊が用いた「ヨイヨイヨイヤサ」の掛け声も勇ましく石を曳いて帰り、当時の玄関前に設置。さらに、毛利邸から持ち帰った3本の松を周囲に植えました。

そして明治40年（1907年）1月8日に本校を訪れた將軍に対し、校長が記念碑のため一筆をと願ったものの、將軍は「私如きが書いては」と辞退するばかりでした。

「無銘碑」が伝える

乃木將軍の謙讓の精神

こうして、ついに文字のない記念碑となったわけですが、後にその由来を記した碑をそばに建て、將軍の謙讓の徳を称えて、「無銘碑」として永久に残されることになったのです。

しかし、諸井氏のコラムが書かれた当時、この碑は7月1日の豪雨で倒れてしまったといえます。

「今では忘れ去られたようなこの碑の無残な姿に気づく者は誰もいないが、果たして再び建てられ敬意をもって眺められる日がくるかどうか。成長した三本の松も一本を残して、二、三年前に立ち枯れ

てしまった」と結ばれています。

乃木將軍の謙虚さと生徒たちの純粹な想いが込められた「無銘碑」。今もなお、豊浦の歴史を静かに見守る存在として、その精神を伝えていきます。



乃木將軍無銘碑

番外編三 乃木將軍と長府の商人

若き日の乃木希典が経験した窮地を救った、長府の町人の物語をご存知でしょうか。

長州藩の支藩である長府藩の重臣であった乃木希次は、藩主・毛利元周に対し、正統な後継者への家督相続を進言しました。しかし、

この直言が藩主の怒りを買ひ、江戸から長府への帰郷と謹慎処分を命じられます。

一家は極寒の中、家族総出で東海道を徒歩で下関まで下るといふ過酷な旅を強いられ、なんとか長府にたどり着きましたが、江戸育

ちの彼らに知人はなく、わずかな旅費も尽きかけていました。乃木希次は幼い子どもたちと病弱な妻を抱え、寒風の中で耐えるしかなかったそのとき、野宿することを決意します。

「子どもたちを巻き添えにするな」

その日の夕刻、一人の男が乃木家を訪ねてきました。城下で旅館「小串屋」を営む町人、神在伊右衛門でした。乃木家の窮状を見かねて、宿への避難を申し出たのです。

武士の意地から、最初は町人の助けを拒む乃木希次。しかし、伊右衛門は「子どもたちを巻き添えにするな」と、毅然とした態度で諭します。その真摯な言葉に心を動かされた希次は、ついにその厚意を受け入れました。

この時、乃木希典は、武士の意地よりも家族の命を救うことを選んだ父の姿を、その目に焼き付けたのではないのでしょうか。そして、身分や立場を超えて差し伸べられた、一人の町人の温かい手を、生涯忘れることはありませんでした。

乃木家は小串屋に身を寄せ、その後百日間の閉門処分を受け、家禄も減らされるなど苦境に立たされました。神在伊右衛門は、そんな乃木家のために近隣の空き家を借りるなど、その後も一家を支え続けました。

今に伝わる「古串屋」の絆

このときの神在伊右衛門の温情は、当時まだ幼かった乃木希典の心に深く刻まれ、彼は生涯この出来事を忘れなかったとされています。

そして月日は流れ、乃木希典は

日露戦争で活躍する陸軍大将となります。長府藩の武士として、また日本の軍人としてその名を歴史に刻んだ彼の人生の原点には、故郷・長府で出会った一人の町人との深い絆があったのです。

現在も、小串屋は「古串屋」として、当時の建物を生かした割烹旅館を営んでいます。その待合室には、乃木希典から贈られた書簡が額装されて大切に飾られており、両家の絆の証として今に伝えられています。

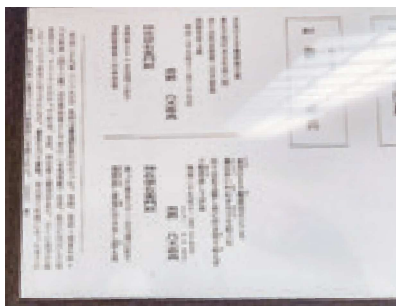
参考文献…軍神 古川薫著



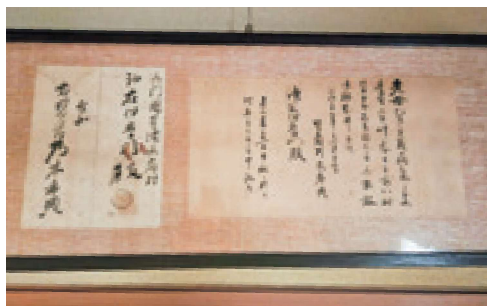
現在の古串屋



現在の古串屋庭



乃木將軍の書簡説明



乃木將軍の書簡



古串屋の神在邦幸会長
(78期)